

故郷ディベートの成果

ディベートを用いて「故郷」を読む

今回、ディベートの入門期におけるゴールとして、「故郷」の読解学習にディベートを取り入れました。ディベートそのものを教える段階からディベートを使っての学習へとジャンプアップした結果、課題はいくつか明らかになったとはいえ、一定の成果はあったと思います。ディベート後に一人一人の生徒が書いた意見文を見れば、そのことがわかります。

魯迅は、この作品を通して「自分の道」について考えてほしかったのだと思う。私たちの前に道はない。だから、どこに行こうが自由だ。しかし、主人公たちの前には道は広がっていた。そして、その道を行くしかなかったんじゃないかと思う。そして、ホンルたちが主人公の来た道をついていこうとしているのを見て「新しい道」を歩んでほしいと思ったのだと思う。

つまり魯迅は、私たちに「新しい道」を歩んでほしいと思ったのではないか。主人公の時代は、凶作や内乱などで本当の自分の道を歩めなかった。でも、今は違う。読者の目の前には、ただ平野が広がっているだけなのだから、自分の思った通りに歩んでほしいと思ったのではないかと思う。

自分の故郷というものは、遠く離れた異郷からみれば平和な天国のようにも感じる。しかし、いざ現実を考えてよく見ると、荒れてすさんだ荒野に変身してしまう。人も心も何もかもが。その中で、何か希望というものはもてないのか。その日その日を切りつめて生活していると、全てが統一されて夢もなくなってしまう。それで結果として、故郷と自分には厚い壁が立ちただかってしまう。

もっと人々の心の中には希望を宿してほしい。故郷の中にいた子どもから現実を知る大人になった今、若い世代には彼らが大人になっても希望をすてないで生きていてほしい。自らが経験することのなかった新しい生活を営んでいてほしい。心の休まる故郷を荒野にしないために。

中国の社会を変えなくてはならないと考えている。それには、わたしのように魂をすり減らす生活や心が麻痺する生活をしたルントウ、野放図に走った生活をしたヤンお婆さんなどの貧しい生活に負けたすさんだ心をもつ人々が希望をもっていくことを願っている。魯迅は若い世代にそれを期待している。

希望というものは、最初からあるともないともいえない。もし、何かをしたいと思っても一人ではできないことが多い。しかし、みんなもそれをやりたいと思えば、できないことはないと思う。だから、みんなが同じ心（希望）をもてば何事もよい方向へ進むのではないだろうか。

『故郷』の最後で、ホンルやシュイション、ルントウや自分自身への「希望」が述べられている。このことを通して魯迅は「希望」とは何かを言いたかったのだと思う。「希望」とは地上の道のようなものであると「わたし」は言っている。そして「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」とも書いてある。つまり「希望」とは、もともとあるものではなく、多数の人々が「希望」へ向かって努力することで実現していくということが一番言いたかったのだと思う。